

## 師範学校における楽器環境 —— 教員・保育者養成の源を探って ——

鈴木 慎一郎

はじめに

本稿では、オルガンからピアノへの変遷に着目し、戦前の師範学校における楽器環境について明らかにすることを目的とする。

日本の教員・保育者養成では、多様な議論が展開されているとはいうものの、ピアノ指導に比重が置かれているのが現状である。ピアノ指導の方法としては、ミュージックラボラトリー・システム（ML）<sup>1</sup> ないしは個人やグループレッスンの形態が挙げられる。後者のレッスン形態の場合、学生が事前に練習してきた課題を確認・指導をする点検（検閲）方式で進められるのが一般的とされる。

服部公一は「ピアノ学習をこの方法——バイエル、チェルニー中心でやるのは昔の師範学校（旧制の初等教員養成学校、今の学芸大学や教育学部の前身）の方式であった」と述べる。<sup>2</sup> 実際に、今日の教員・保育者養成機関においてもしばしば用いられる『バイエルピアノ教則本』や『ツエルニー（30番）ピアノ教本』は、文部省検定済師範学校音楽教科書であった。<sup>3</sup>

『幼稚園教育百年史』には、「師範学校においては、小学校教員も幼稚園教員も同時に養成するので、特別に幼稚園教員の養成機関を置くことは不必要であり、もし置くとしてもそれは附設的、補助的地位にとどまるものという考え方」が「師範学校における幼稚園教員養成の伝統となった」と記される。<sup>4</sup> 1940（昭和15）年3月に実施した文部省の調査資料では、保母養成機関について「東京、奈良両女高師附設のものが官立であり、千葉女子師範保母養成科が公立である外は、凡て私立である。但し岡山のものは県が講習会の形式

で営んであるものであって特殊のものである」と報告される。<sup>5</sup>

このような背景から、師範学校における楽器環境を明確にすることは、今日の教員・保育者養成における音楽教育の在り方を検討する際に重要な手掛かりとなる。研究対象は、保育者養成にも積極的に取り組んでいた岡山県女子師範学校、香川県女子師範学校<sup>6</sup>を中心とする。その他、両校の楽器環境に関する資料を補填し、全体的な動向を探るために、他の師範学校の資料も用いている。

1884（明治17）年の『音楽取調成績申報書』<sup>7</sup>によると、音楽取調掛伝習生に授けられた音楽の内容は「唱歌、洋琴、風琴、箏、胡弓及び欧州管絃楽器」であった。<sup>8</sup> それに対して、東京女子師範学校、東京師範学校では伝習すべきものとして、「唱歌、風琴、箏及び胡弓」<sup>9</sup>が定められた。風琴については「音調の狂い極めて少く、学校唱歌の教授には最も適当にして、且つ習い易きものなれば、之を該校生徒に伝習せば、他日、唱歌を教授するに当り、大なる助となるべし」と説明される。<sup>10</sup>

歌唱活動中心の当時の音楽教育において、伴奏楽器の習得は初等学校教員にとって必須の要件と考えられ、師範学校では「オルガン・ピアノ奏法」が学科課程の中で重要視されていた。刈田均は、1881（明治14）年の『小学唱歌集初編』<sup>11</sup>が発行される以前から、師範学校ではオルガンやピアノが導入されていたと述べる。<sup>12</sup> また、山住正巳は「オルガンは府県師範学校から、しだいに小学校へも普及していった」と記す。<sup>13</sup>

ところで、赤井励は全国的にオルガンが普及する時期を1894（明治27）年から1906（明治39）

年までの期間であると推測する。<sup>14</sup> 他方、西原稔は1927（昭和2）年に河合楽器が発売した「昭和型ピアノ」の登場によって、<sup>15</sup> ピアノの生産台数が急増したと指摘する。<sup>16</sup>

また、赤井は小学校の唱歌教育におけるオルガンからピアノへの移行期の時代区分について、『文部省選定祝祭日儀式用唱歌伴奏譜』<sup>17</sup> が出版された1936（昭和11）年から始まるとする。<sup>18</sup> 師範学校についても初等教育と関連付けて考えれば、オルガンからピアノへの移行期を同時期とするのが合理的であるように思われる。

なお、筆者はすでに2004年に「オルガンからピアノへ：師範学校におけるオルガン・ピアノ指導の変遷」について聞き取り調査に基づいて発表した。<sup>19</sup> 本稿では、新たな文献資料を加え、法規、教科書、楽器の生産状況の点からオルガン・ピアノの楽器環境について考察する。

## 1. 法規における師範学校の器楽指導

1886（明治19）年の「尋常師範学校学科程度ノ事」（明治19年5月26日、文部省令第九号）の中で「単音唱歌複音唱歌楽器用法及音楽上ノ名称記号旋律和声拍子等ノ要略」（下線は筆者による）とある。<sup>20</sup> 1892（明治25）年の「尋常師範学校ノ学科及其程度改正ノ事」（明治25年7月11日、文部省令第八号）では、男生徒は第3、第4学年で、女生徒は第2、第3学年に「楽器ノ用法」<sup>21</sup> が置かれた。

表1は「師範学校教授要目」、表2は「師範学校教科教授及修練指導要目」から器楽指導に関連する箇所を抜粋し一覧にしたものである。

これらの法規では、1910（明治43）年と1925（大正4）年の第一部では「楽器」、第二部では「楽器使用法」、1931（昭和6）年では「楽器使用」、1943（昭和18）年では「器楽」というように名称が変化する。表1に示したように、師範学校が中等学校程度だった時期は、第一部では第2学年から最終学年まで、第二部では全在学期間にわたって継続的に器楽指導が実施されている。それに対

し、表2の官立専門学校程度へ昇格した師範学校では、予科、本科ともに第1学年から器楽指導が開始されている。これには、1932（昭和7）年の「師範学校音楽教員協議会」<sup>22</sup> の議論の成果が反映されている。

扱われる楽器は、1910（明治43）年、1925（大正14）年で、オルガンが主で、ピアノ、ヴァイオリンは選択的な扱いで記述されていた。それに対し、1931（昭和6）年になると、ヴァイオリンが姿を消し、ピアノが主でオルガンがカッコ付きの補足的な楽器として記された。1943（昭和18）年、官立専門学校程度へ昇格した後もピアノとオルガンが併記されている。また、「必要ニ依リ簡易楽器ヲ併セ課スコトヲ得」とある。簡易楽器については、上田友亀の影響が大きいと考えられる。<sup>23</sup>

内容に関しては次の点が指摘できる。

- ・1925（大正14）年では、「進行曲」が含まれている（第4学年以降）。
- ・1931（昭和6）年では、「進行曲」に加えて「祝祭日重音唱歌曲」が挙がっている。
- ・1943（昭和18）年では、「簡易ナル楽曲ヨリ順次諸種ノ楽曲、進行曲及祝祭日重音唱歌曲」となっている（本科第2学年）。

指導方法については、1943（昭和18）年の「師範学校教科教授及修練指導要目」の中で、「器楽八個人指導トシ特ニ実習ヲ重ンズベシ」と記される。

このように、師範学校の器楽指導では、一貫して鍵盤楽器が中心に置かれている。1884（明治19）年の『音楽取調成績申報書』でみられた箏や胡弓の楽器は、姿を消している。オルガンからピアノへの移行については、法令の分析では明確に表れていない。しかし、1931（昭和6）年ではオルガンがカッコ付きで記されていたこと、1943（昭和18）年では、ピアノがオルガンより先に記載されていることから、オルガンよりピアノが重視されていたのではないかと推察される。

表 1 「師範学校教授要目」における器楽指導

	内 容	
	第一部	第二部
1910 M43	<p>第二学年 楽器：おるがんノ構造及各部ノ名称，使用法，基礎的練習，簡易ナル楽曲，但シ       <u>ぴあの若ハばいおりんノ奏法ヲ授クルコトヲ得</u></p> <p>第三学年 楽器：前学年ニ準シ程度稍進ミタル楽曲</p> <p>第四学年 楽器：前学年ニ準シ程度稍進ミタル楽曲</p>	<p>第一学年 (第二学年) 楽器使用法</p>
	<p>&lt; 注意 &gt; 唱歌及楽器ノ教授ニハ總テ本譜ヲ用フヘシ</p>	
1925 T 14	<p>第二学年 楽器：おるがんノ基礎的練習及簡易ナル楽曲但シ<u>ぴあの若ハばいおりんノ奏法ヲ</u>       <u>授クルコトヲ得</u></p> <p>第三学年 楽器：前学年ニ準ス</p> <p>第四学年 楽器：前学年ニ準シ程度稍進ミタル楽曲並<u>進行曲</u></p> <p>第五学年 楽器：前学年ニ準ス</p>	<p>第一学年 (第二学年) 楽器使用法</p>
	<p>&lt; 注意 &gt; 唱歌及楽器ノ教授ニハ總テ本譜ヲ用フヘシ</p>	
1931 S 6	<p>楽器使用ハ本科第一部ニ在リテハ第二学年ヨリ始メ先ヅピアノ（又ハオルガン） ノ構造各部ノ名称及其ノ使用上ノ注意並ニ使用法ヲ授ケ簡易ナル楽曲ヨリ順次諸 種ノ楽曲，進行曲及祝祭日重音唱歌曲ニ及ボスモノトス，本科第二部ニ在リテハ 第一部ニ順ジ第一学年ヨリ之ヲ課スルモノトス</p> <p>&lt; 注意 &gt; 唱歌及楽器ノ教授ニハ總テ本譜ヲ用フヘシ</p>	

出典 『明治以降教育制度発達史』第5巻，第7巻，1939年から作成。下線は筆者による。

表 2 「師範学校教科教授及修練指導要目」(1943年)における器楽指導

学 年	内 容	教授上ノ注意
予科 第1学年	<p>器楽： 「ピアノ」又ハ「オルガン」 片手練習・両手練習 音部記号 ト音記号 音 符 全音符・二分音符・四分音符・八分音符・十六分音符・ 附点音符 休 符 全休符・二分休符・四分休符・八分休符・十六分休符・ 附点休符 拍 子 四分音符ヲ一拍子トシタル二拍子・三拍子・四拍子</p>	<p>・ 歌曲又器楽曲ノ教材 ハ我が国ノ作品ヲ主 トシ適宜外国ノ名曲 ヲ加フルコトヲ得</p> <p>・ 器楽ハ「ピアノ」又 ハ「オルガン」ヲ課 シ必要ニ依リ簡易楽 器ヲ併セ課スコトヲ 得，器楽八個人指導</p>

第2学年	前学年ニ於ケル教授事項ニ付程度ヲ進メテ練習セシム 拍 子 複合拍子ヲ加フ 律 動 切分音・三連符ヲ加フ	トシ特ニ実習ヲ重ンズベシ
本科 第1学年	器楽： 「ピアノ」又ハ「オルガン」 器楽ハ「ピアノ」又ハ「オルガン」ノ奏法ヲ習得セルモノト然ラザルモノト二分チテ之ヲ授ケ前者ハ予科修了程度ニ準ジテ次第二其ノ程度ヲ進メ後者ハ初步ヨリ始メテ予科二年修了程度マデ進マシム	
第2学年	前学年ニ於ケル教授事項ニ付其ノ程度ヲ進メテ課シ更ニ次ノ事項ヲ練習セシム 「ピアノ」又ハ「オルガン」ノ簡易なる楽曲，合唱楽譜視奏，伴奏練習，祝祭日唱歌ノ奏法	
第3学年	前学年ニ於ケル教授事項ニ付程度ヲ進メテ課ス	

出典 文部省『師範学校教科教授及修練指導要目』1943年から作成。

## 2. オルガン・ピアノの導入

### 1) オルガンとピアノの生産状況

教科書の検討に入る前に、この時期のオルガンとピアノの生産数量（図1）と平均価格（図2）について概観しておきたい。<sup>24</sup>『データ・音楽・にっぽん』によると、1936（昭和11）年、オルガンの平均価格は49.7円、ピアノの平均価格は391.8円と最低値となる。翌年の1937（昭和12）年に

は、オルガンの生産数量は19,955台、ピアノの生産数量は7,515台とピークに達する。<sup>25</sup>

西原は、1932（昭和7）年以降のピアノの価格が下落する原因として「ピアノの量産が軌道に乗ってピアノの価格が下落したこと、昭和2年に河合小市が山葉寅楠から袂を分かち、河合楽器研究所を設立するなど、価格競争が行われたこと」を指摘する。<sup>26</sup>

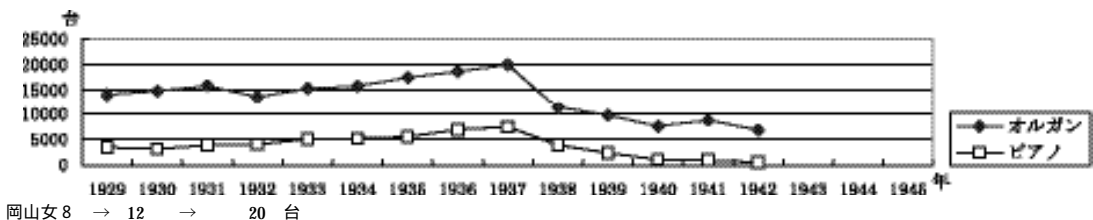


図1 戦前のオルガンとピアノの生産数量

出典 増井敬二『データ・音楽・にっぽん』1980年、15頁から筆者が作成。

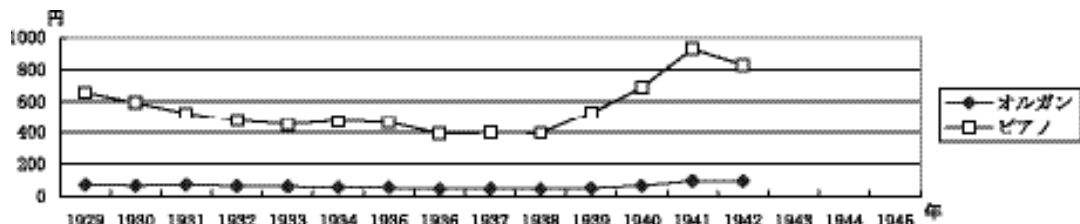


図2 戦前のオルガンとピアノの平均価格

出典 増井敬二『データ・音楽・にっぽん』1980年、15頁から筆者が作成。

## 2) 師範学校へのオルガン・ピアノの導入

音楽取調掛への楽器購入依頼の第一号は、1881（明治14）年11月8日に風琴1台を注文した千葉県女子師範学校である。<sup>27</sup> 例えば、岩手師範学校<sup>28</sup>では、1884（明治17）年にオルガンが購入されたのを発端に、1921（大正10）年頃に堅型ピアノ、1923（大正12）年にグランドピアノが導入される。<sup>29</sup> 坂本麻実子はオルガンについて「明治20年代までは最先端の西洋楽器で、学校の自慢の品」「師範学校でも「御箱入り」という貴重品扱い」と述べる。<sup>30</sup>

一方、黒沢隆朝によると、1912（明治45）年、在学していた秋田県師範学校にはスタインウェイのグランドピアノが講堂に置かれていたそうである。<sup>31</sup> 1921（大正10）年、黒沢が東京音楽学校甲種師範科卒業後に就職した、高知県師範学校にはまだピアノがなく、その年度の途中頃に、やっと老舗のグランドピアノが音楽教室に設置されたとのことである。<sup>32</sup>

次に香川と岡山のケースをみる。

1890（明治23）年、香川県尋常師範学校の開校式の式次第には、「奏楽（ピアノ）」が含まれ、<sup>33</sup> 1891（明治24）年の第2回卒業証書授与式の中では、楠美恩三郎<sup>34</sup>助教諭がピアノ奏楽を行っている。<sup>35</sup> 写真1は、1921（大正10）年頃の香川県師範学校の音楽教室であり、グランドピアノが置かれている。



写真1

1921（大正10）年頃の香川県師範学校の音楽教室  
出典『香川大学教育学部百年のあゆみ』1989年、48頁。

1912（明治45）年4月、香川県師範学校から香川県女子師範学校が分離し、8月、高松から坂出に移転する。その頃の講堂を写したものが、写真2である。これを見ると、講堂にはグランドピアノとオルガンが設置されていたことが分かる。その後1927（昭和2）年頃から、生徒は一人50銭を拠出し、1935（昭和10）年にはピアノが3台と増える。<sup>36</sup>

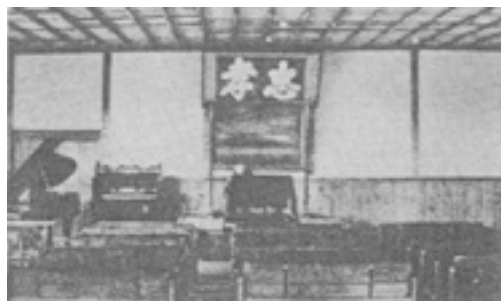


写真2

1912（明治45）年頃の香川県女子師範学校の講堂  
出典『香川大学教育学部百年のあゆみ』1989年、137頁。

一方、『記念誌岡山県女子師範学校』（1932）には、1929（昭和4）年の時期を回顧したものが次のように掲載されている。<sup>37</sup>

ピアノ一括購入の事、本校に這入つて間もない事である、当時校内にピアノ八台オルガン五十台あり、ピアノの実技演習の能率の大なる事近々小学校にもピアノの普及する事及女教員の特質発揮の意味から、ピアノ十二台を購入して二十台とし、オルガンを三十台に削減して数人に楽器一台を与えピアノは四年以上二部に使用させる目的であつた。

当時一台七百円、一年半間に三台、四年半後に十二台、その手始めに三台を購入した。午前六時から、午後六時まで鳴り続けた。

当時二台を有した男子師範が普通であるからこれで女子師範は全国で珍らしく多い方であろう。費用は従来通りの楽器使用料で足りた

のである。他の学校からピアノ購入法を尋ねて来た位である。佐藤吉教諭<sup>ママ</sup>の教授力と相俟ち断然頭角を現はすだろう、

1932（昭和7）年頃において、ピアノ20台、オルガン30台を有している岡山県女子師範学校は、まれな事例といえよう。佐藤吉五郎の存在が大きい。<sup>38</sup>

以下は、新福祐子『女子師範学校の全容』（2000）からオルガン・ピアノに関連する記述を拾い出したものである。<sup>39</sup>

・秋田県女子師範学校

...1928（昭和3）年、卒業生、在校生の寄付金でオーストリア製ピアノ（ペーゼンドルファ）を購入。

・滋賀県女子師範学校

...1923（大正12）年、ドイツピアノ1台寄付を受けた。滋賀県出身の久野久子によってピアノ開きを行った。

・兵庫県女子師範学校

...1928（昭和3）年、同窓会からピアノの寄贈を受けた。

総括すると、ピアノは、1930（昭和5）年前までに師範学校へ導入されていた。岡山県女子師範学校の事例において顕著に示されていたように、ピアノの台数が増加するのは、1931（昭和6）年以降で、増井のピアノ生産数量のデータ（図1）と共通の傾向がみられる。

### 3. オルガン・ピアノ教科書の変遷

当初、音楽取調掛において、伝習生の洋琴（ピアノ）の教材として使用されていたのは、1880（明治13）年メーソンの着任によって移入された英語版『バイエルピアノ教本』であった。<sup>40</sup><sup>41</sup> 実際のカリキュラムについては、山住正巳<sup>42</sup>、小林緑・西恒子<sup>43</sup>、河口道朗<sup>44</sup>、市川理恵<sup>45</sup>、国府華子<sup>46</sup>によって明らかにされる。一方、メーソンは東京師

範学校、東京女子師範学校における唱歌教授では、洋琴（ピアノ）ではなく、風琴（オルガン）を用い、『バイエルピアノ教本』は使用しなかったといわれる。<sup>47</sup>

1900（明治33）年、東京音楽学校の学科改正が行われ、従来の「師範部」は、本科とは別系統の「師範科」と改組され、中等学校の「音楽」の教員養成を目的とする「甲種師範科」と小学校の「唱歌」の専科教員養成を目的とする「乙種師範科」が誕生した。<sup>48</sup> 坂本は「オルガンは、甲種、乙種ともに必修であるが、ピアノは甲種に限定された」と指摘する。<sup>49</sup>

ところで赤井は、日本最初の実用的オルガン教則本として、島崎赤太郎<sup>50</sup>『オルガン教則本』（1899）を取り上げ、「山葉のリードオルガンとともに師範学校でも盛んに使用され、全国に普及し、昭和初期には百版以上を重ねていた」と述べる。<sup>51</sup> また、上野大輔は「1899（明治32）年に発行された島崎赤太郎の『オルガン教則本』は、日本最初の実用的なオルガン教則本であった。島崎の教則本は、特に師範学校において教員養成のために盛んに使用された」と言及する。<sup>51</sup> 山本文茂は、「『バイエル教則本』で代用されていた従来のオルガン教育を根本から立て直し、わが国の実情に適し、かつ、オルガン固有の奏法・技術を有効に組織した名著であった」と評価する。<sup>53</sup> 実際に、村尾忠廣によると、1906（明治39）年の愛知県師範学校において島崎赤太郎の教科書が使用されている。<sup>54</sup> なお、『オルガン教則本』の「緒言」には、以下のように記されている。<sup>55</sup>

世に書を編する程難きものはあらざらむ。殊に教科書は其の最たるものなるべし。余や嘗て音楽学校に在りて、専ら風琴を修め、今現に之を同校に受け、常に自らも修め、又人にも授く。世の教科書、程度分量順序等、其の当を得しもの殆寡し。是れ余の常に痛難する所なり。此の弊や独り本邦のみ然るにあらず。英に、独に、仏に、米に、又皆然りとなす。

聊か試に其の然る所以を述べむか。其の編纂の目的たる、純ら音楽教育の為のみならず。或は花の晨、或は月の夕、家族団楽、朋友集会、一座娯楽の資料に供せむが為なり。聞く或は又一種の目的の為に亦之を作れりと。偶音楽教育の為作れる者あるも、独は高尚に奔せ、米は浅薄に逸す。英も仏も亦自から一得一失の存するあり。概して之を許せば、外国編纂の書は本邦の士女に適せざるは殆ど一般の通弊たらむか。

本書は素より自ら完全善良のものとは信ぜず、然れども斯の点には深く観る所ありて以て、玆に編纂することを得たり、抑風琴の奏法や、目に楽譜を見、手足同時に其の作用をなすものなり。其れ斯の如く此の三点に三箇の注意を要す。豈に手芸中最も至難のものにあらずや。

本書は、務めて其の程度の高きを避け、其の分量の少きに附く。而して其の順序の如きは、簡より繁に、易より難に、徐々として進み行くこととはなせり。

実に本書は音楽初歩の階梯に過ぎざるのみ。然れども学者此の階梯により、其の門に入り、其の堂に昇り自から漸く進みて其の蘊奥を極むるに至らば、余の本懐又何ぞ之に若かむや、

表3は、1886（明治19）年から1942（昭和17）年における文部省検定済教科書の中から、器楽教科書を抽出して作成したものである。図書名において、「ピアノ」が初めて使用されたのは、1918（大正7）年発行の楠美恩三郎『オルガン、ピアノ教科書』である。なお、1910（明治43）年度に限っては、文部省によって各師範学校で使用されたオルガン・ピアノ教科書が明らかにされているため表4に示した。<sup>56</sup>

先ほども紹介したように、赤井や上野は、島崎の『オルガン教科書』について「師範学校でもさかんに使用され」と述べる。しかし、表3には島崎赤太郎『オルガン教則本』が掲載されていない。ということは、島崎の『オルガン教科書』は、文部省の検定を受けていないということである。表5に示したように、京都府師範学校の1903（明治36）年度教科用図書の中に、島崎赤太郎『オルガン教則本』が確認できる。しかし、1912（明治45）年になると、田村虎蔵『オルガン教科書』へと変わり、表4で示した内容と一致している。愛知県第一師範学校の場合も同様である。愛知県第一師範学校では、1906（明治39）年には、島崎の『オルガン教則本』が使用されていたのに対し、1910（明治43）では天谷秀・多梅稚<sup>57</sup>『初等オルガン教科書』が用いられている。

表3 文部省検定済オルガン・ピアノ教科書の一覧

発行年月日	検定年月日	著者・図書名・発行者	O	O P	P
1905（M38）. 1. 27訂正再版	M38. 2. 7	天谷秀・多梅稚『初等オルガン教科書』西野虎吉			
1907（M40）. 2. 4訂正再版	M40. 2. 20	田村虎蔵『オルガン教科書』2巻、安井清			
1911（M44）. 10. 5再版発行	M44. 11. 1	楠美恩三郎『オルガン軌範』共益商社書店			
1911（M44）. 4. 25訂正再版	M44. 11. 28	吉田信太『オルガン軌範教本』2巻、三木佐助			
1915（T4）. 4. 2訂正再版	T4. 4. 15	中田章『オルガン教科書』共益商社書店			
1916（T5）. 1. 7修正再版	T5. 1. 17	共益商社書店『オーガン教本』共益商社書店			
1916（T5）. 3. 25訂正再版	T5. 4. 14	天谷秀『中等オルガン教科書』鈴木常松・鈴木常次郎			

1917 ( T 6 ). 1 . 23 修正再版	T 6 . 1 . 26	共益商社書店『続オーガン教本』共益商社書店		
1917 ( T 6 ). 1 . 28 訂正再版	T 6 . 2 . 2	田村虎蔵・吉田信太『オルガン教科書』松邑孫吉		
1917 ( T 6 ). 3 . 1 訂正再版	T 6 . 3 . 20	開成館音楽課『実用オルガン教本』三木佐助		
1917 ( T 6 ). 2 . 28 訂正再版	T 6 . 4 . 9	音楽研究会『新撰オルガン教科書』三木佐助		
1918 ( T 7 ). 1 . 26 訂正再版	T 7 . 1 . 31	楠美恩三郎『オルガン，ピアノ教科書』高井徳造		
1920 ( T 9 ). 3 . 25 再修訂 11 版	T 9 . 6 . 25	中田章『オルガン教科書』共益商社書店		
1923 ( T 12 ). 12 . 12 再修 35 版	T 13 . 2 . 16	共益商社書店『オーガン教本』共益商社書店		
1924 ( T 13 ). 6 . 20 訂正再版	T 13 . 7 . 17	田中銀之助『標準オルガン教本』三木佐助		
1928 ( S 3 ). 1 . 27 修正再版	S 3 . 2 . 2	小笠原良造『新撰オルガン学習教本』大蔵廣三郎		
1930 ( S 5 ). 12 . 7 修正再版	S 5 . 12 . 20	真篠俊雄『初等オルガン教科書改訂版』三木佐助		
1931 ( S 6 ). 2 . 20 修正 10 版	S 6 . 2 . 28	高折宮次・平田義宗『バイエル新訂教則本』平田義宗		
1931 ( S 6 ). 11 . 1 再訂修正	S 6 . 11 . 9	楠美恩三郎・楽書刊行協会『オルガン・ピアノ教科書』高井徳造		
1931 ( S 6 ). 11 . 7 訂正	S 6 . 11 . 25	楽書刊行協会『昭和オルガン教科書』高井徳造		
1932 ( S 7 ). 3 . 15 修正再版	S 7 . 3 . 22	宮原禎次・林松木『昭和ピアノオルガン教本』三沢朝一		
1932 ( S 7 ). 6 . 27 修正 27 版	S 7 . 7 . 9	萩原英一『バイエルピアノ教則本』共益商社書店		
1933 ( S 8 ). 2 . 10 修正再版	S 8 . 2 . 21	萩原英一『ピアノオルガン音階指づかひ教本』共益商社書店		
1933 ( S 8 ). 9 . 15 修正再版	S 8 . 10 . 3	小笠原良造『新選ピアノ教本』大倉克次		
1933 ( S 8 ). 10 . 7 修正再版	S 8 . 10 . 19	高折宮次『ピアノ新教本』東洋図書		
1933 ( S 8 ). 12 . 23 訂正再版	S 9 . 1 . 24	島崎赤太郎・白井保男『新訂オルガン教科書』共益商社書店		
1933 ( S 8 ). 11 . 15 修正再版	S 9 . 2 . 22	萩原英一『ツエルニー（30 番）ピアノ教本』共益商社書店		
1934 ( S 9 ). 3 . 5 訂正再版	S 9 . 3 . 13	田村虎蔵『最新オルガン教科書』松邑孫吉		
1936 ( S 11 ). 3 . 22 修正再版	S 11 . 3 . 28	真篠俊雄・草川宣雄『オルガン新教本』東洋図書		
1936 ( S 11 ). 6 . 5 再版訂正	S 11 . 6 . 24	楽書刊行協会『昭和オルガン教科書再訂』高井徳造		
1936 ( S 11 ). 11 . 15 訂正再版	S 11 . 11 . 30	高折宮次・真篠俊雄『初等ピアノ，オルガン教科書』三木佐助		



1938 ( S 13 ). 2 . 22 修正再版	S 13 . 3 . 2	真篠俊雄・草川宣雄『高等オルガン新教本』 東洋図書		
1940 ( S 15 ). 7 . 19 修正再版	S 15 . 8 . 28	黒沢隆朝・小川一朗『標準オルガン教則本』 2巻, 共益商社書店		

出典 文部省『検定済教科用図書表』から作成。

注 O : オルガン教科書, OP : オルガン・ピアノ教科書, P : ピアノ教科書。

横線で実線の部分は, 「師範学校教授要目」の改定を意味する。

表4 1910 ( 明治 43 ) 年度における師範学校で使用されたオルガン・ピアノ教科書

図書名	冊数	発行年月日	検定年月日	定価	著作者	発行者	使用師範学校
初等オルガン教科書	1	38.3.6	38.3.8	50	天谷秀・多梅稚	開成館	岩手男女, 長岡女, 愛知第一, 愛知第二, 福岡, 熊本女, 滋賀, 長崎, 山形, 奈良男女, 鹿児島男女, 香川, 池田, 天王寺, 大阪女, 三重, 大分女, 長野女, 岡山女, 高知男女, 石川, 佐賀男女, 青森
オルガン教科書	2	40.2.4	40.2.20	85	田村虎蔵	安井清	岩手女, 富山男女, 京都, 青山, 豊島, 東京女, 新潟, 福岡, 福岡女, 熊本, 群馬男女, 広島, 山形女, 徳島男女, 栃木, 静岡女, 千葉女, 福島, 愛媛男女
新編オルガン教科書		41.11.31		50	天谷秀	鈴木常松	京都女, 三重女, 岡山, 徳島, 愛媛
ピアノオルガン手ほどき	1	39.6.18		30	石原重雄	富山房	長岡女
ピアノオルガン楽譜	1	32.6.22		50	音楽学校	大日本図書	長岡女, 熊本女, 群馬女
撰定オルガン教本	1	42.7.5	42.7.6	50	開成館音楽部	開成館	福岡女, 秋田男女, 池田, 福島, 愛媛女, 山梨男女, 青森
オルガン教則書	1	37.6.22		50	島崎赤太郎	白井直	長野
風琴階梯	1	36.5.3		50	田村虎蔵・多梅稚	中村善吉	福島

出典 文部省『師範学校中学校高等女学校 使用教科図書表 明治43年度』1912年, 142-147頁(『師範学校・中学校・高等女学校使用教科図書表 明治43年度 文部省』教科書研究資料文献第十一集, 芳文閣, 1992年復刻版使用)。

注 発行, 検定の年号は明治。使用師範学校の欄で, 男女の明記のないものはすべて男子部。下線は筆者による。

表5 京都、奈良、滋賀、福岡の師範学校で使用されたオルガン・ピアノ教科書の推移

年度	京都府師範学校	奈良県師範学校	滋賀県師範学校	福岡県内師範学校
1903 (M36)	多梅稚『風琴階梯』 (1903) 島崎赤太郎『オルガン教則本』(1899)	多梅稚『風琴階梯』 (1903)		
1910 (M43)		天谷秀・多梅稚『初等オルガン教科書』 (1905)		
1912 (M45)	田村虎蔵『オルガン教科書』(1907)			
1913 (T2)		天谷秀・多梅稚『初等オルガン教科書』 (1905)		楠美恩三郎『オルガン軌範』(1911)(福岡一部)
1918 (T7)			『初等オルガン教科書』	吉田信太『オルガン軌範教本』(1911)(福岡二部)
1919 (T8)				音楽研究会『新撰オルガン教科書』 (1917)(小倉)
1920 (T9)	楠美恩三郎『オルガン、ピアノ教科書』 (1918)			共益商社『オールガン教科書』(1916)(小倉)
1924 (T13)			田中銀之助『標準オルガン教本』(1924)	
1925 (T14)	楠美恩三郎『ピアノ、オルガン教本』			
1931 (S6)	真篠俊雄『初等オルガン教科書』(1930)			
出典	『京都府師範学校沿革史』1938年。	『奈良県師範学校五十年史』1940年。	『滋賀県師範学校六十年史』1935年。	平田宗史『福岡県教員養成史研究——戦前編』1994年。

図3は、「師範学校教授要目」等の法令の改訂の時期ごとに区分して、図書名で「オルガン教科書」「オルガン・ピアノ教科書」「ピアノ教科書」に大別した結果である(表3参照)。

1886(明治19)年から1909(明治42)年までの時期では、オルガン教科書、2種類のみであった。それに対し、1931(昭和6)年から1942(昭和17)年までの時期においては、オルガン教科書が7種類、オルガン・ピアノ教科書が4種類、ピアノ教科書が4種類となる。師範学校が昇格した1943(昭和18)年には、ピアノ教科書である

国定の文部省『師範器楽 本科用巻一』に結実する。<sup>58</sup> このように、教科書の変遷からも、オルガンからピアノへの移行が確認できる。

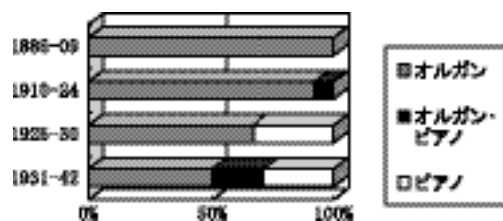


図3 教科書の種類

おわりに

本稿では、師範学校における楽器環境を中心に検討してきた。判明した点は以下の通りである。

1) 取り扱う楽器について：1925（大正 14）年までの「師範学校教授要目」で示されていた「ばいおりん」の記述は、1931（昭和 6）年ではなくなり、「ピアノ（又ハオルガン）」と鍵盤楽器に限定された。

1943（昭和 18）年の「師範学校教科教授及修練指導要目」では、「ピアノ」又は「オルガン」と記され、必要によっては「簡易楽器」を加えることが可能となった。

2) 指導学年について：1931（昭和 6）年の「師範学校教授要目」では、本科第一部（修業年限 5 年）については、第 2 学年から第 5 学年まで、本科第二部（修業年限 2 年）については、全学年でオルガン・ピアノが指導されることになっていた。

一方、1943（昭和 18）年の「師範学校教科教授及修練指導要目」では全学年に器楽指導が置かれた。

3) 教科書について：1886（明治 19）年から 1909（明治 42）年までの時期では、オルガン教科書、2 種類のみであった。その後、オルガン・ピアノ教科書、ピアノ教科書が発行され、1943（昭和 18）年 4 月から国定制が採られ、文部省『師範器楽 本科用巻一』（1943）1 種類だけ発行された。

塚原康子は「1931 年（昭和 6 年）の満州事変以後は、時局にかなう吹奏楽にたいする関心がいっそう高まり、全国で学校バンドの結成が相次ぐようになる」と指摘する。<sup>59</sup>『京都府師範学校沿革史』（1938）には、「昭和六年五月音楽同好会創立」と記載されている。<sup>60</sup>このような動きは、中等教育、高等教育に限ったことではない。供田武嘉津によると、初等教育の場においても音楽隊が結成されたとのことである。<sup>61</sup>師範学校は部活動が盛んなところであったことは有名である。<sup>62</sup>今後は、師

範学校における授業外での音楽活動が、教員・保育者養成にどのような影響を与えたかについても追求したい。

1952（昭和 27）年に東京芸術大学において開催された「音楽科指導者講習会」では、『バイエル』や『チェルニー』等が学校教員に必要な実力基準として示された。<sup>63</sup>1979（昭和 54）年発行の『季刊音楽教育研究』に掲載されている調査結果に基づき算出すると、大学・短期大学 25 校のうち、『バイエルピアノ教則本』をテキストとして挙げたのが 16 校（64%）であった。<sup>64</sup>このように師範学校は制度上廃止されたというものの、ピアノ教材は戦後においても継承されたのである。

---

1 ミュージックラボラトリー・システムは、指導者用楽器（親機）と学生用楽器（子機）をケーブルで接続することにより集団における鍵盤学習を効率的に行なうシステム

（<http://www.yamaha.co.jp/product/ml/about/>）

ML に関する先進的な先行研究としては、静岡大学共同研究「鍵盤楽器の集団指導とその効果について」『音楽教育学』創刊号、日本音楽教育学会、1971 年、104-109 頁が挙げられる。その他、保育者養成における ML の先行研究は以下の通り。澤田直子・原田文夫「保育者養成における ML を活用した音楽教育」『拓殖大学論集 人文・自然科学』Vol.1, No.3, 1994 年、89-113 頁。奥田昌代「保育者養成における、ピアノ伴奏技能向上の試み：ML（ミュージックラボラトリー）システムを活用して」『大阪信愛女学院短期大学紀要』第 41 集、2007 年、41-50 頁。

2 服部公一『子どもの声が低くなる：現代ニッポン音楽事情』筑摩書房、1999 年、207 頁。

3 鈴木慎一郎「文部省検定済師範学校音楽教科書の概観：1931～43 年を中心として」『関西楽理研究 X X 』関西楽理研究会、2006 年、47-

67 頁。

- 4 文部省『幼稚園教育百年史』ひかりのくに，1979 年，84 頁。
- 5 岡田正章監修『大正・昭和保育文献集』第十三巻，日本らいぶらり，1978 年，49 頁。
- 6 1933（昭和 8）年に香川県女子師範学校附属幼稚園が設置されたことに伴い，保育実習が実施された（香川大学教育学部百周年記念事業実行委員会『香川大学教育学部百年のあゆみ』香川大学教育学部百周年記念事業実行委員会，1989 年，177 頁）。1947（昭和 22）年，香川師範学校保姆養成所が開設（日本保育学会『日本幼児保育史』第六巻，フレーベル館，1975 年，160 頁）。
- 7 伊沢修二『音楽取調成績申報書』東京，1884 年，23 頁（山住正巳校注『洋楽事始』平凡社，1971 年を使用）。
- 8 同上，27 頁。
- 9 同上，28 頁。
- 10 同上，29 頁。関連する研究は以下の通り。  
上野大輔「オルガン」日本音楽教育学会編『日本音楽教育事典』音楽之友社，2004 年，96 頁。  
その他，東京芸術大学百年史刊行委員会，財団法人芸術研究振興財団『東京芸術大学百年史 東京音楽学校篇 第一巻』音楽之友社，1987 年，111-116 頁，参照。
- 11 文部省音楽取調掛編『小学唱歌集』三編，1881-1884 年。
- 12 刈田均「学校教育とオルガン・ピアノ」横浜市立歴史博物館・横浜開港資料館編『製造元祖 横浜 風琴洋琴ものがたり』横浜市歴史博物館・（財）横浜市ふるさと歴史財団，2004 年，10 頁。
- 13 山住正巳『唱歌教育成立過程の研究』復刊学術書，東京大学出版会，1967 年（1979 年復版使用），186 頁。山住は次のように続ける。「しかし，全国の学校へ普及させるには，音楽取調掛をとおしてアメリカから購入するだけではまったく不十分であり，日本の業者によるオルガン

製作の発展がなければならなかった。民間業者は，取調掛におけるオルガン製作の努力とは別に，独自に研究をかさね，1884（明治 17）年ごろから製作が可能となったようである。二十年代になると，山葉寅楠も製作にとりかかった」（カッコ内は筆者による加筆）。また，山住はさらに次の注を加えている。「しかし全国のすべての師範学校にいきよにオルガンがそろったわけではない。たとえば山口師範学校では，「当時本校には生徒練習用の風琴が 1 台あったのみ」。

- 14 赤井励『オルガンの文化史』青弓社，1995 年，51 頁。
- 15 檜山陸郎『楽器産業』音楽・楽器ビジネス早わかり読本，1990 年，223 頁。
- 16 西原稔「産業史の視点から見た戦前における日本のピアノ産業」比較文明学会編『比較文明』13，刀水書房，1998 年，108 頁。
- 17 『文部省選定祝祭日儀式用唱歌伴奏譜』大日本図書，1936 年。
- 18 赤井励「オルガンと唱歌の伴奏」『原典による近代唱歌集成——誕生・変遷・伝播——解説・論文・索引』ビクターエンタテインメント，2000 年，215 頁。  
京都市学校歴史博物館編『我が国の近代教育の魁 京の学校・歴史探訪』京都市社会教育振興財団，160 頁にはこう書かれている。「明治期の教授用楽器は風琴（オルガン）であった。古い記録によると，明治 19 年の小学校令で，尋常小学校で裁縫科が廃止され，裁縫専科の先生たちは，転科のため風琴による唱歌指導の講習会を受けた。講習会修了者には資格が与えられ，各小学校は競って唱歌授業を実施しようとしていたが，風琴の購入が容易ではなかった。（中略）輸入ピアノが入ってきたのは，大正末期から昭和初期にかけてであった」。
- 19 鈴木慎一郎「オルガンからピアノへ：師範学校におけるオルガン・ピアノ指導の変遷」『音楽表現学』vol.2，日本音楽表現学会，2004 年，

- 35-50 頁。なお、本稿は鈴木慎一郎『昭和前期の師範学校における音楽教育実践に関する史的研究』兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科博士論文、2006 年、171-180 頁を基に加筆・修正を行った。
- 20 文部省教育調査部『師範教育関係法令の沿革』1938 年、68 頁。
- 21 同上、135、144-145 頁。
- 22 「器楽ヲ本科第一部第一学年ヨリ課シ得ルヤウ改ムルコト」(同声会編集部『同声会報』第 181 号、1932 年、32 頁)。
- 23 上田友亀『国民学校器楽指導の研究』共益商社書店、1943 年。遠藤によると、「簡易楽器」が学校教育の中で用いられ始めたのは、1932 (昭和 7) 年ころのことである(遠藤尚子「簡易楽器」日本音楽教育学会編『日本音楽教育事典』、前掲書、267 頁)。なお、山住は、1881 (明治 14) 年末頃、日本でオルガン製造が始まるまでの数年間、「簡易楽器」が用いられていたと述べる(山住、前掲書、63 頁)。
- 24 先行研究としては以下のものがある。西原稔『ピアノの誕生』講談社、1995 年。西原稔「産業史の視点から見た戦前における日本のピアノ産業」比較文明学会『比較文明』13 号、刀水書房、1997 年、98-115 頁。田中健次『近代日本における洋楽器産業と音楽文化』大阪大学大学院文学研究科博士論文、1998 年。
- 25 増井敬二『データ・音楽・につぼん』民主音楽協会、1980 年、15 頁、には次のように記されている。「ピアノもオルガンもその平均価格が、昭和 11 年を最低として昭和 4 年からだんだんと下がっている事である。では物価が昭和 11 年は安かったのかと(中略)物価指数を見ると、当時の最低は 6 年の物価指数 74.8 で、11 年は物価指数が 103.6 とかなり物価が高くなっているのである」。
- 26 西原稔「産業史の視点から見た戦前における日本のピアノ産業」比較文明学会編『比較文明』13、刀水書房、1998 年、107 頁。西原は、1927 (昭和 2) 年、河合楽器が 350 円で発売した 64 鍵(5 オクターブ)の「昭和型ピアノ」と呼ばれるアップライトピアノが、ピアノの普及に影響を与えたと述べている(108 頁)。
- 27 村尾忠廣「唱歌教育の地方への普及」『音楽教育研究』8 月号、音楽之友社、1970 年、145 頁。村尾忠廣「学校唱歌の開設と地方への普及」東京芸術大学音楽取調掛研究班編『音楽教育成立への軌跡』音楽之友社、1976 年、423 頁。
- 28 便宜上「岩手師範学校」を使用しているけれども、次に示すように校名が改称されている。1876 (明治 9) 年、盛岡師範学校創設、1879 (明治 12) 年、県立岩手師範学校と改称、1886 (明治 19) 年、岩手県尋常師範学校と改称、1898 (明治 31) 年、岩手県師範学校と改称、1923 (大正 12) 年、女子部独立、岩手県女子師範学校設置、1943 (昭和 18) 年、岩手県師範学校ならびに岩手県女子師範学校を官立に移官、岩手師範学校と改称(作道好男・作道克彦編『岩手大学教育学部百年史』教育文化出版、1983 年、1019-1022 頁)。
- 29 岩手大学教育学部創基百年刊行委員会編『創基百年 岩手大学教育学部』1976 年、145-155 頁。なお、音楽取調掛への楽器購入依頼は、1883 (明治 16) 年 1 月 23 日に風琴 1 台が出されている(村尾「学校唱歌の開設と地方への普及」前掲書、423 頁)。
- 30 坂本麻実子『明治中等音楽教員の研究：『田舎教師』とその時代』風間書房、2006 年、14 頁。
- 31 黒沢隆朝『図解 世界楽器大事典』雄山閣、2005 年(初版 1972 年)、392-395 頁。「私が初めてピアノを見たのは 16 歳であり、秋田市の師範学校の講堂に、外国製のキイの重いグランドピアノがあって、先輩成田為三などが、ソナチネの一番を得意そうに弾いていたのが印象的であった」(392 頁)。なお、筆者は、故黒沢隆朝氏の甥の武石佳久氏や秋田県立博物館学芸主事の糸田和樹氏から資料の提供を受け、参考に

している。

- 32 同上。なお、音楽取調掛への楽器購入依頼は、1883（明治16）年1月27日に風琴1台が出されている（村尾「学校唱歌の開設と地方への普及」前掲書、423頁）。

嶋田由美は、「全国学校音楽の状況」『音楽』8巻1号、1905（明治38）年5月18日に基づき、「明治30年代前半になっても地方の師範学校の中にさえピアノを所有していない学校もあった」と指摘する（嶋田由美「小学校校歌制定に関する研究：明治後期における東京府内小学校校歌制定過程の分析を通して」『音楽教育学』第16号、日本音楽教育学会、1987年、24頁）。

- 33 香川大学教育学部百周年記念事業実行委員会、前掲書、15頁。

- 34 安田寛・北原かな子「楠美恩三郎と弘前」『弘前大学教育学部紀要』第81号、弘前大学教育学部、1999年、71頁。

- 35 同上、33頁。式次第の中で「ピアノ奏楽」は4回組み込まれている。最初の3曲は、《碧蹄館戦歌》（男子2年生）、《保児ノ歌》（女子第3・2年生）、《仰げば尊し》（卒業生神船幸吉氏）とあるので、歌と組み合わせられて演奏、最後の1曲は曲目が記されていないけれども、楠見助教諭のピアノ独奏であったと考えられる。

熊野勝祥『香川県明治教育史』香川県図書館学会・香川県中学校社会科研究会、2000年、423頁。『香川新報』1891年5月6日。

- 36 香川大学教育学部百周年記念事業実行委員会、前掲書、174頁。「熱心な人は寸暇を惜しんで、ツェルニー、更にソナチネ・ソナタと、力をつける者も多くなった」。

- 37 岡山県女子師範学校編『記念誌岡山県女子師範学校』1932年、143頁。

- 38 佐藤吉五郎（1902～1991）、堺市における和音感教育の推進。1921（大正10）年秋田県師範学校卒業後、教職に就く。1923（大正12）年東京音楽学校甲種師範科入学、1926（大正15）年卒業、岡山県女子師範学校教諭となる。

1934（昭和9）年大阪府堺市視学に転出。1943（昭和18）年海軍教授となり、神奈川県久里浜の対潜学校に赴任（木村信之『音楽教育の証言者たち上 戦前を中心に』音楽之友社、1986年、187頁）。

佐藤自身、岡山県女子師範学校について以下のように著している。

私は大正15年に東京音楽学校を卒業、岡山県女子師範学校教諭として足かけ10か年の間、移動階名唱による音楽教育を真剣に実施した。

ご承知のように、師範学校は小学校教員の養成が主目的であるから、歌唱・器楽・和声学・教授法・音楽理論を教えたが、そのいずれの1つを取り上げてみても、困難なものばかりである。特に女教師は全員音楽科を担当しなければならない不文律のようなものがあって、音楽科は彼女たちにとって、重要な学科であった。（中略）

器楽は、小学校1年から高等2年までの伴奏が弾けなければならないのに、5か年間の力では弾けない。特に当時の文部省唱歌の伴奏は非常にむずかしかった。

（佐藤吉五郎「戦中の音感教育——現場からの証言」『日本の音楽教育』音楽之友社、1975年、74頁）

その他、筆者は、佐藤吉五郎が岡山県女子師範学校音楽科教員だったころに、岡山県女子師範学校附属小学校教員（1927 - 40年）であった恒次恒次氏に聞き取り調査を行った。2005（平成17）年6月3日（金）、於：エスペランスわけ（岡山県和気郡和気町）。岡山師範学校卒業生の岡嶋信夫氏も同席。恒次氏は、岡山県女子師範学校について「オルガンは、20～30台あった。各教室（普通教室）の中や廊下に置いてあり、休み時間や放課後に生徒が練習をした。運動会の際は、オルガンを数台持ち出し、伴奏に使った」と回想する。また、中田吉昭編『恒次恒次先生百年記

念誌』2005年、15頁の中で、恒次氏は以下のように著している。

岡山女子師範学校の音楽の先生に佐藤吉五郎という先生が昭和9年3月まで十ヶ年居られた。津山民謡や奥津小唄を作曲された有名な先生である。私は本校と附属との関係で何時も指導をしてもらったり、仕事を共にしたりすることが多かった。

- 39 新福祐子『女子師範学校の全容』家政教育社、2000年、344、686、729頁。なお、新福は、岡山県女子師範学校、香川県女子師範学校のオルガン・ピアノの設置状況についても言及している(806、872頁)。
- 40 Mason, Luther Whiting, 1818-1896年。
- 41 森節子「明治前期」日本音楽教育学会編『日本音楽教育事典』音楽之友社、2004年、755頁。西原稔『ピアノの誕生』講談社、1995年、221-222頁。
- 42 山住、前掲書、119-148頁。
- 43 小林緑・西恒子「取調掛における授業」東京芸術大学音楽取調掛研究班編、浜野政雄・服部幸三監修『音楽教育成立への軌跡』音楽之友社、1976年、341-367頁。
- 44 河口道朗『近代音楽教育論成立史研究』音楽之友社、1996年、156-182頁。
- 45 市川理恵「音楽取調掛におけるピアノ教育の導入」『日本女子大学人間社会研究科紀要』第2号、日本女子大学、1996年、41-51頁。市川理恵「音楽取調掛におけるピアノ教育の実際：「教授細目」及び使用教則本の考察を中心に」『音楽教育史研究』第2号、音楽教育史学会、1999年、1-11頁。
- 46 国府華子「わが国における明治期のピアノ教育：音楽取調掛、東京音楽学校を中心に」『音楽教育史研究』第2号、音楽教育史学会、1999年、25-26頁。
- 47 森節子「明治前期」日本音楽教育学会編『日本音楽教育事典』、前掲書、755頁。河口、前掲書、183-193頁。
- 48 坂本麻実子「東京音楽学校の青春：明治36年度～40年度入学生の修学状況からの考察」『桐朋学園大学研究紀要』第26集、2000年、29頁。
- 49 坂本『明治中等音楽教員の研究：『田舎教師』とその時代』、前掲書、17頁。
- 50 島崎赤太郎、東京音楽学校教官…専門・担当：オルガン、和声学、楽式一班、事務、邦楽調査掛、唱歌編纂掛、楽語調査掛。在職期間：1893(明治26)年8月31日～1933(昭和8)年4月13日。生没年：1874(明治7)年7月9日～1933(昭和8)年4月13日(東京芸術大学百年史編集委員会・財団法人芸術研究振興財団編『東京芸術大学百年史 東京音楽学校編 第二巻』音楽之友社、2003年、1560頁)。
- 51 赤井『オルガンの文化史』、前掲書、119頁。その他、島崎の『オルガン教則本』が売れた理由について、赤井は「官立の東京音楽学校の先生が書いた教科書というのが、師範学校の先生たちには使いやすかったのだろう」と考察している(同上、122頁)。
- 52 上野「オルガン」日本音楽教育学会編『日本音楽教育事典』、前掲書、97頁。
- 53 山本文茂「唱歌教育の時代(明治後期)」= 試行・定着期 奥田真丈監修『教科教育百年史』建帛社、1985年、403頁。
- 54 村尾忠廣「藤原彦吉による唱歌教育の実践(一)：明治期、愛知県八名郡における一教師の記録」『音楽教育研究』第16巻第6号、音楽之友社、1973年、31頁。
- 55 島崎赤太郎編『オルガン教則本』巻、共益商社書店、1899年(1926年重版使用)。
- 56 文部省『師範学校中学校高等女学校 使用教科図書表 明治43年度』1912年、142-147頁(『師範学校・中学校・高等女学校使用教科図書表 明治43年度 文部省』教科書研究資料文献第十一集、芳文閣、1992年復刻版使用)。
- 57 浜野政雄は、天谷秀・多梅雅編『初等オルガン教科書』1905年について次のように考察し

ている。「はじめにオルガンの使用法として姿勢や手指の運用法、踏板、増音器の練習法などをあげ、八長調、ト長調、ヘ長調と順次唱歌旋律、民謡、各国々歌等に簡単な伴奏をつけた練習曲をあげている。興味深いのは、今日も多くの音楽科授業の始めと終わりに楽器で演奏される三挙動あるいは四挙動の挨拶用合図の楽譜を掲げていることである」(浜野政雄「音楽」財団法人教科書研究センター編『旧制中等学校教科内容の変遷』ぎょうせい、1984年、370-371頁)。

58 鈴木慎一郎「文部省『師範器楽 本科用巻一』(1943)の特質：真篠俊雄編『改訂初等オルガン教科書』(1930)との比較から」『白梅学園大学・白梅学園短期大学教育・福祉研究センター「研究年報」』第11号、2006年、43-55頁。

59 塚原康子「軍楽隊と戦前の大衆音楽」『ブラスパンドの社会史』青弓社ライブラリー 20、青弓社、2001年(2004年重版使用)、115頁。

60 三国谷三四郎編『京都府師範学校沿革史』京都府師範学校、1938年、176頁。

61 供田武嘉津『日本音楽教育史』音楽之友社、369頁。

62 明石要一「昭和期師範生の生活史」石戸谷哲夫・門脇厚司編『日本教員社会史研究』亜紀書房、1981年、476頁には以下のように記されている(調査対象：千葉師範の1926年から1945年度卒の男子生徒)。

放課後多くの生徒がクラブ活動に参加していたが一部生は必須だったので彼らが中心となっていた。クラブの種類は運動系や文化系などさまざまあった。しかし、文武を両立させる剛健な精神をもつことが教育目標の一つであったから、運動系のクラブが奨励され盛んであった。一番人気のあったクラブは「柔剣道」で3割をこえるものが参加している。次が「陸上競技」(11.2%)で、そのあとに「バスケット」(6.6%)、「野球」(5.5%)、「庭球」(5.5%)と続いている。その他、「ボート部」「バレー部」「弓道部」「グライダー部」「音楽

部」などがあるが、これらはとりたてて人気のあるものではなかった。

63 東京芸術大学音楽学部編『音楽教育法研究 音楽教育法研究会報告書』音楽之友社、1953年、26-29頁。

64 「大学、短大へのアンケート調査より」『季刊音楽教育研究』1979年夏号/第22巻第3号、音楽之友社、1979年、60-73頁。